

## E・バーク政治思想研究序説

岸 本 広 司

### An Introduction to the Study of E. Burke's Political Thought

Hiroshi Kishimoto

#### Summary

Edmund Burke was a member of the British House of Commons for almost thirty years. Because of his occupation, and also because of his native cast of mind, he did not present his political thought in an organized way. But Burke was a prominent political thinker who saturated politics with thought and provided the model for applying first principles to practical affairs. As his political thought contains moral and political wisdom, we can learn great lessons from it.

In this paper, I discussed about what is the most proper method for the studying of Burke's political thought and emphasized the significance of the young Burke's thought.

Received April 30, 1987

#### I

エドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) が、バッキンガム州ウェンドーヴァ (Wendover) のヴァーニ卿 (Ralph Verney, 2nd Earl of Verney) 所有のポケット選挙区からイギリス下院に出たのは1765年12月、最初の議会演説を行なったのは、翌66年1月17日のことである。当時としてはいささか歳をとったこの「新人」の処女演説は、ほとんど準備なしに行なわれ、そのためバーク自身には必ずしも満足のいくものではなかった<sup>(1)</sup>。しかしバークにとって記念すべきこの議会演説は、彼の控え目な自己評価にも拘らず大成功であった。傍聴席でこの演説を聴いた名優ギャリック (David Garrick) が、バークの雄弁に感嘆して、政界デビューの成功を祝賀するバーク宛書簡を翌18日に認めている<sup>(2)</sup>ことからその成功ぶりを窺い知ることができる。

バークの二回目の議会演説は、処女演説から10日後の1月27日に行なわれた。それは、いわゆる印紙条例 (Stamp Act) に反対し、その税法の廃止を主張したものであった。この日のバークの雄弁は、前回以上に人々を驚嘆させた。例えばバークに続いて登壇したチャタム伯・大ピット (the Elder Pitt, 1st Earl of Chatham) は、「非常に有能な弁論家<sup>(3)</sup>」と述べてバークの政治家としての才能を誉め称え、

サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) も、「バークはその最初の登場において、恐らくこれまでの誰よりも輝かしい名声を博した。彼が下院で印紙法撤回に関して行なった二回の演説は、ピット氏によって人前で推賞されて以来街全体を驚嘆させている。バークは生まれつきの大人物だから、やがて公的世界で大をなすものと期待されている<sup>(4)</sup>」と語って政治家バークの誕生を歓迎し、且つまたその将来に大いなる期待を寄せたのであった。

さてこのようにして、バークの政界登場は颯爽たるものであった。それは、バッキンガムシャー卿 (John Hobart, 2nd Earl of Buckinghamshire) をして、「バーク氏は屋根裏部屋から政界の頂点に登ってきた<sup>(5)</sup>」と言わしめ、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole) をして、「『印紙条例をめぐる』この論争の中で新しい雄弁家が誕生した。彼はその優れた弁舌によって、名声を異常なほどの早さで獲得した。彼の名前はエドモンド・バークである<sup>(6)</sup>」と日記に書かしめ、また処女演説から10ヶ月後には、チャタム内閣の実質的首班グラフトン (Augustus Henry Fitzroy, 3rd Duke of Grafton) をして、「バーク氏は、下院の中でもあらゆる点で恐らく最も頼りになる男だ。……彼は味方にすれば最も有益な人物である<sup>(7)</sup>」とまで言わしめたほどのものであった。バークは華々しい政界デビューを飾り、多くの人々から注目を受けると共に、将来の活躍が大いに嘱望されたのであった。そしてバークは人々の期待に背くことなしに、1797年の死去に至るまでの約30年間、ウィルクス事件、アメリカ革命、アイルランド統治、インド統治、フランス革命といった重大な政治問題に立ち向かい、西洋の政治史と思想史に大きな足跡を残していったのである。

ところで、バークは他の偉大な政治家や思想家たちと同様に、必ずしも賞賛ばかりされてきたわけではなかった。その評価は一定しておらず、在世中から死後今日に至るまで、時には絶賛され、時には厳しい批判に晒されてきた。ここでバーク評価の歴史を概観しておくならば、我々は、生前のバークに賞賛と非難がほぼ同時に集中した時期があったことを知っている。それは、言うまでもなくバークがフランス革命批判に立ち上がった時であった。すなわち、『フランス革命の省察』(*Reflections on the Revolution in France*, 1790) が刊行されるや、ジョージ三世、ロシアの女帝エカテリーナ、ポーランドの国王スタニスラフといったヨーロッパの支配者たちや、W・ウィンダム (William Windham)、モンターギュ夫人 (Elizabeth Montagu)、E・ギボン (Edward Gibbon) といった保守的な政治家や知識人たちは、『フランス革命の省察』に盛り込まれたバークの反革命思想を絶賛した。他方、C・J・フォックス (Charles James Fox)、J・マッキントッシュ (James Mackintosh)、J・プリーストリー (Joseph Priestley)、T・ペイン (Thomas Paine)、M・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) といったウィッグ左派の政治家や急進主義者たちは、革命を擁護する数多くのパンフレットを書いてバークを激しく論難した。そして彼らの多くは、ウィルクス事件や植民地問題に対するバークの姿勢と、フランス革命に対する彼の姿勢との間には決定的な相違があり、後者のバークは到底容認し得るものではないとして「変節したバーク」を厳しく糾弾した<sup>(8)</sup>。

しかしながらこのように論難されたバークも、革命フランスが対外戦争を始め、執政政府からナポレオン独裁へと推移するにつれて、ロマン主義運動の先駆者として崇敬されるようになった。すなわち、W・ワーズワース (William Wordsworth)、S・T・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge)、

ド・メストル (Joseph de' Meistre), F・ゲンツ (Friedrich Gentz), ノヴァーリス (Novalis, Friedrich von Hardenberg), A・ミュラー (Adam Müller) といった19世紀前半期のロマン主義者たちは、「革命に対する革命の書<sup>(9)</sup>」たる『フランス革命の省察』に圧倒的な影響を受け、バークを歴史や伝統や共同体の発見者、啓蒙主義の機械論や合理論に対する徹底せる反抗者、神への信仰を失わなかった敬虔なキリスト者、この幻滅した世界に現われた最後の予言者と看做して、詩的想像力と溶け合ったその政治思想を賞揚したのである。代表的なロマン主義者の一人ワーズワースは、自伝的長詩『序曲』 (*Prelude*, 1805) の中で、バークを称えてこう歌っている。

Genius of Burke! forgive the pen reduced  
 By specious wonders, and too slow to tell  
 Of what the ingenuous, what bewildered men,  
 Beginning to mistrust their boastful guides,  
 And wise men, willing to grow wiser, caught,  
 Rapt auditors! from thy most eloquent tongue——  
 Now mute, for ever mute in the cold grave  
 I see him,——old, but vigorous in age,——  
 Stand like an oak whose stag-horn branches start  
 Out of its leafy brow, the more to awe  
 The younger brethren of the grove. But some——  
 While he forewarns, denounces, launches forth,  
 Against all systems built on abstract rights,  
 Keen ridicule ; the majesty proclaims  
 Of Institutes and Laws, hallowed by time ;  
 Declares the vital power of social ties  
 Endeared by custom ; and with high disdain,  
 Exploding against Theory, insists  
 Upon the allegiance to which men are born——<sup>(10)</sup>

バークを評価する気運は、イギリスにおいてその後より一層高まった。すなわち、ウィッグ史学が全盛を誇ったヴィクトリア朝時代になると、J・プライアー (James Prior), T・マックナイト (Thomas Macknight), J・モーリー (John Morley), H・T・バックル (Henry Thomas Buckle), L・スティーヴン (Leslie Stephen), W・E・H・レッキー (William E・H・Lecky) といったヴィクトリア朝時代の自由主義者たちは、フランス革命よりもアメリカ革命期のバークに注目して、バークをウィッグ原理に立脚した功利主義的自由主義者、穏健な議会主義的改良主義者、イギリス憲政の偉大な擁護者と看做して、柔軟な姿勢で対象に即応しながらも現実に埋没することのなかった道徳的に高貴なその思想と行動を誉め称えた<sup>(11)</sup>。例えばプライアーとスティーヴンは、最大級の賛辞をもって

バークを次のように称えている。

「ピットやフォックスのように有能で、優れた業績を残した政治家はこれまで多数輩出した。しかしキケロ以降、バークのような人物が出現するまで2000年を要した<sup>(12)</sup>。」

「いかなるイギリスの著述家と言えども、バーク以上に輝かしい賛辞を受けた者もなければ、それに値した人物もいない<sup>(13)</sup>。」

このようにして、バークの評価はヴィクトリア朝時代に定まった感があった。しかし19世紀後半から今世紀の前半にかけて、バーク評価の反動期が訪れ、彼は再び批判されるようになった。この批判期において、バークを「厭わしい政治的流行語屋」(execrable political cantmonger)と呼びながら、その態度を「無節操」で「追従」的であるとしたマルクスの非難<sup>(14)</sup>は著名なところである。また、バークは「ロッキンガム・ウィッグの御用哲学者<sup>(15)</sup>」であって、「真理の探求者でも哲学者でもない<sup>(16)</sup>」というJ・H・プラム(J. H. Plumb)やR・M・ハッチンズ(Robert M. Hutchins)のバーク批判も研究史上あまねく知られているところである。更に、今世紀前半期のルイス・ネーミア(Lewis Namier)によるバーク指弾は、それまでの批判の中でも最も激しいものであった。すなわちネーミアによれば、バークは利己的で攻撃的な政党政治家であり、「真実に触れようとせず、それを想像力による作り話と取り換えがちな哀れな観察者<sup>(17)</sup>」でしかない。それ故バークの著作は「全く馬鹿げた考え」(arrant nonsense<sup>(18)</sup>)で満ちており、有名な彼の「二重内閣」説も、「豊かな想像力によって美しく入念に作り上げられた虚構の物語<sup>(19)</sup>」以外の何ものでもない<sup>(20)</sup>。ネーミアの考えでは、バークは「文学的思いつき<sup>(21)</sup>」による18世紀イギリス史の歪曲者、退嬰・反動的で原理を欠いた日和見主義的政略家に過ぎず、人類の進むべき方向を感得した精神的予言者でも、気高い理念を持って時代の課題と取り組んだ道徳主義的实践家でも決してなかったのである<sup>(22)</sup>。

こうしてバークは必ずしも賞賛ばかりされてきたわけではなかった。むしろ在世中から今世紀の前半期まで多くの人々の批判に晒されてきた。しかし周知の如く、今世紀の後半になるとバーク評価の気運が再び盛り上がった。すなわち、第二次大戦後、アメリカを中心としてバークへの関心が再度高まり、その評価もかつてないほど高揚したのであった。R・J・S・ホフマン(Ross J. S. Hoffman)、R・カーク(Russell Kirk)、C・パーキン(Charles Parkin)、C・B・コーン(Carl B. Cone)、P・J・スタンリス(Peter J. Stanlis)、F・P・キャナヴァン(Francis P. Canavan)、B・T・ウィルキンズ(Burleigh Taylor Wilkins)といった論者たちが、バークを再評価せんとした主たる人々である。こうした研究者たちによるバーク政治思想の再興は、一般に「バーク・リヴァイヴァル」(Burke Revival)と言われている<sup>(23)</sup>。

この「バーク・リヴァイヴァル」を促したものとしては、主として次の二つのものが考えられよう。一つは、それまで非公開であったバークの書簡やノートが公刊されて、研究者の間に従来のような資料的制約がなくなったということである。すなわち、膨大な数に上るバークの書簡は、第二次大戦終了までフィッツウィリアム家の所蔵品として一般に公開されてこなかった。しかしそれら書簡は、1949年にシェフィールド市中央図書館(the Public Library of the City of Sheffield)に移管されて、研究者の閲覧に供せられるようになったばかりか、1958年から78年の間には、T・W・コーブランド

(Thomas W. Copeland)を総編集者としてA・コバン(Alfred Cobban)やL・S・サザランド(Lucy Stuart Sutherland)たちの手で整理・編纂され、全10巻より成る『エドモンド・バークの書簡集』(*The Correspondence of Edmund Burke*)として刊行されたのである<sup>(24)</sup>。更にそれに加えて1957年には、いわゆる「空白期」(Missing Years)に書かれた全24篇の詩や評論がH・V・F・サマセット(H. V. F. Somerset)の手で編纂され、E・バーカー(Ernest Barker)の序文を付して『エドモンド・バークのノート・ブック』(*A Note-Book of Edmund Burke*)として公刊されたのである<sup>(25)</sup>。こうした資料の公開及び出版が、研究者の眼を再びバークに向けさせるその重要な契機となったことは疑い得ない。この純粋に学問的条件の改善によって、ほとんど関心さえ持たれなくなっていたバークは再び研究者の注目を受けるようになったのである。

バークの復活を促したと考えられる今一つのものは、第二次大戦後のアメリカの政治情勢と、それに伴っていわゆる「新保守主義者」(New Conservative)たちの間に生じた強い危機意識である。すなわち、戦争終結と共に共産主義勢力が増大して世界各地に共産主義国が誕生したが、この共産主義の伸張に危機感を抱いた保守的な知識人たちは、アメリカの価値のみならず西洋の文明全体を守るために、共産主義に対抗し得る保守主義政治哲学を構築することの必要性を痛切に感じた。そこで彼らは、伝統的なヨーロッパ文明を守るためにジャコバン主義と死闘を演じたバークに多大の関心を抱き、バーク政治思想の中に保守主義の諸理念を看取して、彼の思想を20世紀後半の西側社会に復活させようとしたのである。R・A・ビーヴァン(Ruth Anita Bevan)はこう述べている。

「バークへの関心を復活させた第二のものは政治の領域で発展した。フランシス・キャナヴァン、ロス・ホフマン、ラッセル・カーク、ペーター・スタンリスといった学者たちは、自らを『新保守主義者』と呼ぶアメリカの人々のために哲学的な引照基準を与えた。彼らはバークの中に、今日一般に保守主義の明白な教義と看做されている政治原理を見出した。……バークは哲学的に模倣され、現在では『近代保守主義の父』と誉めそやされるようになっているのである<sup>(26)</sup>。」

こうしてバークは復活した。その結果水準の高い研究書が数多く世に出、アメリカではバーク専門誌さえ発行されるようになった<sup>(27)</sup>。「意地悪いネーミア学派の攻撃から決して蘇生できないであろう<sup>(28)</sup>」と思われていたバークは、文字通り復活したのであり、しかも伝統的な自然法論者という新たな姿で再び甦ったのである。

## II

すでに多くの論者によって指摘されてきたように、バークは単純な意味での現実主義者でも、現実から遊離した観念的な理想主義者でも決してなかった。むしろ彼は現実と理想の中間領域で、M・ウェーバー的表現を用いて言うならば、「心情倫理」(Gesinnungsethik)と「責任倫理」(Verantwortungsethik)を持って思考し行動し続けた人物であった。確かに、イギリスの歴史の中でバーク以上の業績を上げ、バーク以上に大きな影響を与えた政治家がいることは疑い得ない。またイギリスの近代思想に限って見ても、彼より優れた思想家は数知れず、その名を挙げるのは容易である。例えば、T・ホッブズとJ・ロックは論理性や体系性において、D・ヒュームは知的鋭さにおいて、A・スミスは

観察力において、J・S・ミルは方法論的厳密さにおいてバークをはるかに陵駕していた。しかしながらバークには、理念なき機会主義的政治家や、実践性の希薄な観想的思弁家に欠如している道徳知もしくは政治知が、別な言葉で言うならば、倫理的・政治的叡知としての「思慮」(prudence)あるいは「実践知」(practical wisdom)が他のいかなる者よりも豊かに備わっていた。そしてバークは、「政治的・道徳的諸徳の最上位に位するのみならず、それらのすべてを指導し規制する基準である<sup>(29)</sup>」思慮もしくは実践知によって、「この世代の政治哲学に、他のいかなる政治家も有したことのなかったような方向感、高貴且つ強力な目的、及び問題の複雑さの認識等を与えることができたのであった<sup>(30)</sup>。」

バークの特質を今一度述べておこう。彼は、時流に乗って状況主義的に生きる原理原則なき政治家でも、抽象的な観想の世界に浸る非行動的な思弁家でも決してなかった。むしろ彼は、問題の錯綜する流動的な状況の世界で一貫した政治原理を追い求め、それをば実践知を媒介としながら実際的な政策の中に具現化していく、そしてそうした政治的行為を通じて、「真の政治の原理とは、道徳性を拡大することである<sup>(31)</sup>」というかの基本命題をより良く実現していく極めて道徳主義的な政治家であり思想家であった。つまり、倫理性の欠如した技術主義や理論偏重のドグマティズムを批判しながら、高邁な道徳理念に裏打ちされ、しかも歴史や経験に根差す幾多の実際的政策論を提示した、その意味で、政治と倫理を結合させることによって政治学そのものを再び実践学の一つとして捉え直した、まさしく文字通りの実践的政治思想家、バーク自身の表現を用いて言うならば、良き政治目的のために良き手段を発見し、それを用いて良き目的の実現を図る「行動の場の哲学者」(philosopher in action<sup>(32)</sup>)に他ならなかったのである。

歴史上、こうした種類の人物こそ稀有である。なるほど、バークの思想には今日の我々から見て首肯し得ぬものが多くある。例えば、ウィルクス問題におけるジョージ三世批判が歴史学的に見て果たして正しいかどうかは疑問である。また彼のフランス革命理解はあまりにも未熟である。彼はフランスの歴史的状況を正しく捉えることができず、革命運動の内実を理解することができなかった。更に彼は、民衆を弁護しながらも民主主義者ではなく、むしろ彼自身は貴族主義者であった。彼の擁護した社会秩序も、多分に貴族を中心としたそれであった。また植民地問題において、被抑圧者の側に立って植民地人を弁護しながらも、バーク自身は植民地の独立を認めようとしない帝国主義的な人物であった。したがって、我々はバークに対して盲目的であってはならず、彼の思想を批判の俎上に載せて、その限界性をも指摘していかなければならないであろう。しかし幾多の問題性を抱えながらも、倫理的・政治的叡知に満ちた彼の思想には、或る普遍的な価値が内在していることは間違いない。それ故にこそバークは、後世の人々に強い感銘と影響を持続的に与えることができたのであった。次に引用するのは、近代無政府主義の祖とも言うべきW・ゴドウィン(William Godwin)と、マルクス主義に親近性を持ったH・J・ラスキ(Harold J. Laski)の言葉である。彼らの政治的立場はバークのそれとは決定的に相違しているにも拘らず、彼らは共に、バークの倫理的・政治的卓越性を称えてこう述べている。

「人類の長い天才の記録の中でも、バークに比肩し得る人を見出すことはほとんどできない。眼識の鋭さにおいて、概念の豊かさにおいて、判断の明敏さと深さにおいてバークは他の誰よりも優れ

ている。……公平な人ならば、バークを想起すれば必ずや彼の道德感の崇高さと高潔さを認めざるを得ず、また彼が、卓越した愛国主義者であり博愛主義者であったことを確信せざるを得ない<sup>(33)</sup>。」「フォックスが大いに愛すべき人物として記憶され、ピットが手際良い引用に長けた驚くべき青年でしかなかったのに反して、バークは政治家の必携すべき政治的叡知の不朽の手引となった。バークに学ばぬ政治家は、海図にない海上の水夫同然であると言ってよい<sup>(34)</sup>。」

### III

ところで、こうした「行動の場の哲学者」たるバークを正しく理解するためには一体いかなる研究方法をとるべきであろうか。近年の新保守主義者たちの方法は、果たして適切な研究方法と言い得るであろうか。この点において我々は、バーク研究の気運を促したという点で彼らの功績を認めなければならないとしても、彼らの方法にはいささか疑問を感じざるを得ない。なぜならば、イデオロギー的色彩の濃いバーク研究になっているという点や、バークに対しておよそ無批判的で、バーク賛美に終始しているという点はさて置いても、C・B・コーンの場合を除いて彼らの研究が外在的になり過ぎており、対象に即した内在的な研究には到底なっていないからである。そのことは、C・パーキンの『バーク政治思想の道德的基礎』(*The Moral Basis of Burke's Political Thought*, 1956)やP・J・スタンリスの『エドモンド・バークと自然法』(*Edmund Burke and the Natural Law*, 1958), 及びF・P・キャナヴァンの『エドモンド・バークの政治理性』(*The Political Reason of Edmund Burke*, 1965)において顕著であろう。確かに彼らのバーク解釈には首肯し得るものが多くあり、バーク政治思想の究極的な基礎は宗教であるという、パーキンやスタンリスやキャナヴァンの解釈を大筋では認めなければならないであろう。けれども彼らは、なかならずスタンリスは、バークの思想を体系的・整合的に説明することに急で、バークをバーク自身に即して生きた形で内在的に論ずることができなかった。つまり彼らは、自らの解釈の正当性を立証するために自らに都合の良いバークの言葉を、彼の諸著作から作品相互間の時間的隔たりやそれらが発せられた具体的背景を無視して断片的に拾い集め、それらの言葉を或る一定の解釈枠組の中で多分に恣意的に羅列し、その結果、バークを解釈者の側からあまりにも外在的・主観的に捉えてしまうという方法論的に大きな過ちを犯しているのである。

もとより我々は、彼らのそうした研究方法を全面的に否定するわけではない。思想史研究の方法として、それは有効性を持った一つの方法であろう。しかし或る思想を正しく理解するためには、でき得る限り対象に即し、その思想を可能な限り内在的に考察しなければならぬことは言うまでもない。とりわけ体系性や理論的完結性が希薄で、理論的一貫性を問うこと自体が立派に研究テーマとなり得るような、しかも、問題の錯綜する複雑極まりない実践の場で、常に具体的状況との関わりの中で発言し行動してきたバークのような人物の思想を取り上げる場合、その思想を対象に即しながら、対象のまさにその内側から考察していくことは非常に重要なことである。別言するならば、バークの如き人物の思想を正しく捉えるためには、伝記的考察を交えながら、その思想を形成史的あるいは発展史的に考究することは極めて重要であり、むしろそうした方法こそが最も適切なのである。その点から

して我々は、G・W・チャプマン（Gerald W. Chapman）やF・オゴーマン（Frank O’Gorman）の研究手法<sup>(35)</sup>に賛同する。彼らは、パーキンやスタンリスやキャナヴァンのような方法を意識的に避け、むしろバークの思想を具体的な状況との関わりの中でその形成・発展過程に即しながら、また彼自身の経歴に関連させて、その意味からして内在的に考察しながらバークの政治思想を生きた姿で捉えんとしたのである。

しかしながら我々は、チャプマンやオゴーマンの方法を良しとしながらも、彼らの研究そのものに対しては必ずしも全面的に賛同し得ない。というのも彼らは、如上のような方法を取りながら、しかし研究の対象を政界登場以降のバークに限定し、それ以前のバークを全く無視しているからである。つまり彼らは、初期バークには全く何の考慮も払っていないのである。彼らが初期バークを無視したのはそれなりの理由がある。けだしイギリス政界に登場する36歳以前のバークは、必ずしも政治的な人物であったわけではなく、むしろ非政治的な美学者であり、文芸批評家であり、歴史家であり、ジャーナリストであったからである。つまり政界登場に先立つバークは、詩を作り、美的主題を考究し、文芸作品を批評し、イギリスやアメリカの歴史を回顧し、社会の時事問題を論じる、コーブランドが「混合的著述家」（mixed author）<sup>(36)</sup>と呼んだ典型的な人物であったのである。そのことを明らかにするために、まずここに初期の作品を挙げておこう。

『改革者』（*The Reformer*, 1748.）

『折々の詩』（*Poems on Several Occasions*, 1748.）

『自然社会の擁護』（*A Vindication of Natural Society*, 1756.）

『アメリカにおけるヨーロッパの植民地についての説明』（*An Account of the European Settlements in America*, 2 vols, 1757. — 以下『植民地についての説明』と略記する。）

『崇高と美についての我々の観念の起源の哲学的研究』（*A Philosophical Inquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757. — 以下『崇高と美』と略記する。）

『イギリス史略』（*An Essay towards an Abridgment of the English History*, 1757.）

『年鑑』（*Annual Register*, 1759 — [1766.]）

『アイルランド・カトリック刑罰法論』（*Fragments of a Tract relative to the Laws against Popery in Ireland*, [1761–65.] — 以下『刑罰法論』と略記する。）

『演劇論覚え書き』（*Hints for an Essay on the Drama*, n. d.）

こうした書名からも窺い知ることができるように、これら初期著作は必ずしも政治的な作品ではない。むしろ厳密に言うならば、それらは政治とは別のジャンルのものであった。例えば、『改革者』は主としてダブリンの演劇事情を題材としつつ、良き文芸趣味を持つべきことを広くダブリンの市民に訴えた週刊誌であり、『折々の詩』は純然たる詩集、『自然社会の擁護』は、当時の急進的な啓蒙思想を揶揄した一種の風刺物語、『崇高と美』は、従来の美的範疇の誤りを正し、よって崇高と美の客観的基準を確立せんとした美学論文、『植民地についての説明』と『イギリス史略』は、前者はアメリカ新



大陸におけるヨーロッパ人の植民の歴史を、後者はシーザーのブリテン侵攻からマグナ・カルタに至るまでのイギリス人の発展史を叙述した歴史作品、『年鑑』は、さまざまな分野の問題を取り上げたジャーナリスティックな年次刊行物、『刑罰法論』は、アイルランドにおける宗教的・社会的問題を取り扱った時局論、そして『演劇論覚え書き』は、遅くとも1765年までには書かれていたと推定される短い演劇論であった。

したがって、それらは政界登場後に著わされた政治的作品とは性格を異にし、そのためバーク研究史上、これら初期著作が政治思想との関連で議論されることはおよそなかった。そのことは、ロマン主義者においても、19世紀の自由主義者においても、また「バーク・リヴァイヴァル」を担った人たちにおいても、更には、R・ビセット（Robert Bisset）からR・H・マレー（Robert H. Murray）やP・マグナス（Philip Magnus）を経て、現代のA・P・ミラー（Alice P. Miller）に至る伝記作家たちにおいても同様である。彼らはおしなべて、初期著作の政治思想的意義を問わず、そのためそれらをバーク政治思想の形成過程の中に有機的に組み入れることもなかったのであった。もっとも我々は、『崇高と美』と『自然社会の擁護』がこれまで少しく論じられた<sup>(37)</sup>ことを知っている。しかし前者はあくまでも美学的に論じられるか、その美学史的意義が指摘されるにとどまり、政治思想との関連性が問われることはまずもってなかった。更に後者の方も、たとえその政治思想的意義が探られようとも——強いて言うならば、初期の作品の中で後の成熟せる思想との関わりが指摘されてきたのは本書だけである——、『自然社会の擁護』を単独に論じるばかりで、その意義が他の初期作品との関連の下で考察されることはほとんどなかった。そしてこうした事情は今日においても基本的に変わらず、非政治的時期に著わされた初期の作品は、それらが一見して非政治的なものであるがために、研究者たちに今なお看過され続けているのである。例えば先に挙げたオゴーマンは、その著『エドモンド・バーク——彼の政治哲学』（*Edmund Burke : His Political Philosophy*, 1973）の中でこう語っている。

「バークは1765年に政治の世界に身を投じたが、それ以前の約10年間は著述家であった。彼の初期の作品の中に後年現われてくるものの種子を捜し求めるのは興味深い。しかしそうしたものを捜し求めても無駄である。実際、初期の作品の中には一貫した政治的意見など全くない。しかも、それらの大半は断じて政治的作品ではない。『崇高と美』は美学に関する論文であり、『自然社会の擁護』は自然賛美の哲学原理（the principles of natural philosophy）を皮肉っぽく、また論争的に攻撃したものである。そして、『イギリス史略』と『植民地についての説明』は歴史を叙述したものである。バークの関心は異常なほどに多様であった。しかし1765年以前のバークは、政治や政治哲学に関しては未だ明確なものを持っていなかったのである<sup>(38)</sup>。」

こうして、初期バークの諸著作は無視されてきた。のみならず、バークがそうした作品を著わしたという最小限の事実さえあまり語られてこなかった。非政治的なものは、非政治的なものであるがために政治的に論じる価値はないとされてきたのである。

しかしながらこうした初期の諸著作が、政治的に非ざるとして全面的に無視されて良いとは思えない。確かに、或る人物の政治思想を研究する場合、その人物の政治思想はあくまでもその人の政治的

著作の中に表現されていると考えて、そうした著作を検討すれば当該人物の思想を自ずと捉えることができると考えがちである。このことは、それ自体誤りではない。政治的著作が政治的なものを含んでいるのは当然であり、それ故政治思想を研究する場合、そうした類いの著作を何よりも重視しなければならぬことは言を俟たない。けれども、政治的な事柄は必ずしも政治的な著作の中でのみ語られているわけではなく、むしろ非政治的な作品の中で、却ってそれ以上に豊かに語られている場合もあるものである。それ故に、政治とは全く異質の作品が、実は非常に政治的であることが往々にしてある<sup>(39)</sup>。また非政治的な時期に、非政治的なものを著わすことによって、むしろ政治的なものを醸成し、それを自覚化していくということも往々にしてある。まさしくパークがそうであったのではないだろうか。彼は非政治的な作品を著わすことによって、政治的なものを形成したのではないだろうか。否むしろ、そうした作品を著わすことによってこそ、自らの政治思想を形成し得たのではないだろうか。我々が初期のパークに関心を抱く所以である。

ここで、若きパークに注目する理由を今少しく述べておこう。先述したように、パークは議会における処女演説で、その才能の豊かさの故に多くの人々を驚嘆させた。政界の有力者は、ロッキンガム派がパークのように優秀な人材を獲得したことを祝福すると共に、その将来に大いなる期待を抱いた。そしてパークは人々の期待に背くことなしに、その才能が単に表面的なものではないことを早くも数年後に証明したのであった。すなわち、彼は政界登場から3年後の1769年に『「国家の現状」と題する近刊の書物を論評する』(*Observations on a Late Publication, intituled, "The Present State of the Nation"*)を、翌70年には古典的名著『現在の不満の原因を論ず』(*Thoughts on the Cause of the Present Discontents*)を著わして、それらにおける理論が高い見識と深い思想に基礎づけられたものであることを如実に示したのである。そしてそのことによって彼は、政界に入ったその時点で、あるいはその直後に、自らの思想が少なくとも基本的な部分ではすでにかかなりの程度成熟していることを明らかにしたのであった。

とするならば、パークの政治思想を形成史的あるいは発展史的に把握しようとする我々にとって、初期のパークを無視するのはもはや許されないということになるだろう。もし政界登場時、もしくはその直後のパークの思想がすでに相当なまでに成熟していたとするならば、それを成熟せしめた、まさにその準備の時期を検討するのは極めて重要な作業ということになるのである。そこで我々は、政界登場以前のパークに着目して、非政治的なものの中から政治的なものを析出し、初期の作品相互の密接な繋がりと、後の政治思想との有機的な関連性を探っていこうと思う。そしてホッブズの科学主義に陥らず、また俗流マキアヴェリのような技術主義にも陥らなかったパークの政治思想が、一体どのようなようにして形成されたのかを考察しようと思う。パークの政治思想を全体的に理解するためには、まずこのような考察から始めなければならないであろう。

#### 注

- (1) Cf. Burke to Charles O'Hara (18 January 1766), *The Correspondence of Edmund Burke*, General ed. by T. W. Copeland, 10 vols (Cambridge : At the University Press ; Chicago : The University of Chicago Press, 1958-78),

vol. I, pp. 231-33.

- (2) Cf. David Garrick to Edmund Burke (18 January 1766), *ibid.*, pp. 233-34.
- (3) John Timbs, *Anecdote Lives of William Pitt, Earl of Chatham, and Edmund Burke* (London: Richard Bentley & son, 1880), p. 202; Basil Williams, *The Life of William Pitt*, 2 vols (London: Longmans, Green, and Co, 1914), vol. II, p. 197.
- (4) James Boswell, *The Life of Samuel Johnson*, Everyman's Library, 2 vols (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1973), vol. I, p. 320. (中野好之訳『サミュエル・ジョンソン伝(1)』[みすず書房, 1981年], 382頁。)
- (5) Quoted in Robert H. Murray, *Edmund Burke: A Biography* (Oxford: Oxford University Press, 1931), p. 132.
- (6) Quoted in *ibid.*, p. 143.
- (7) Quoted in Issac Kramnick (ed.), *Edmund Burke* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1974), p. 100.
- (8) フランス革命をめぐるイギリス国内の論戦については, cf. Philip Magnus, *Edmund Burke: A Life* (London: John Murray, 1939), pp. 213-20; Carl B. Cone, *Burke and the Nature of Politics: The Age of the French Revolution* (Lexington: University of Kentucky Press, 1964), pp. 351-53; James T. Boulton, *The Language of Politics in the Age of Wilkes and Burke* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1975), pp. 75-271; F. P. Lock, *Burke's Reflections on the Revolution in France* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1985), pp. 132-65.
- (9) Novalis, Aphorismus 104, quoted in Reinhold Aris, *History of Political Thought in Germany: from 1789 to 1815* (New York: Russell & Russell, 1965), p. 270.
- (10) William Wordsworth, *Prelude*, VII, 512-30.  
 なお、バークがロマン主義者たちに与えた影響については次のものが詳しい。Frieda Braune, *Edmund Burke in Deutschland: Ein Beitrag zur Geschichte des historisch-politischen Denkens* (Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung, 1917); Aris, *op. cit.*, pp. 251-65; Hans Barth, "Edmund Burke and German Political Philosophy in the Age of Romanticism," in *The Idea of Order: Contributions to a Philosophy of Politics*, trans. by E. W. Hankamer and W. M. Newell (Dordrecht-Holland: D. Reidel Publishing Co., 1960), pp. 18-47; Michel Ganzin, *La Pensee Politique d'Edmund Burke* (Paris: Librairie Générale de Droit et de Jurisprudence, 1972), pp. 335-412.
- (11) 19世紀ヴィクトリア朝時代のバーク評価については, cf. John J. Fitzgerald, "Burke's Reputation in the Nineteenth Century," *Burke Newsletter*, vol. V (Spring-Summer, 1964), pp. 331-35; Isaac Kramnick, *The Rage of Edmund Burke: Portrait of an Ambivalent Conservative* (New York: Basic Books, Inc., 1977), pp. 40-42; Lock, *op. cit.*, pp. 177-89; 鶴田正治『イギリス政党成立史研究』(亜紀書房, 1977年), 150-57頁参照。
- (12) James Prior, *Life of the Right Honourable Edmund Burke*, 5th revised edn (London: George Bell & Sons, 1884), pp. 534-35.
- (13) Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, 3rd edn, 2 vols (New York: Peter Smith, 1949), vol. II, p. 219. (中野好之訳『18世紀のイギリス思想史(II)』[筑摩書房, 1970年], 95頁。)
- (14) Cf. Karl Marx, *Das Kapital*, 3 Bände (Berlin: Dietz Verlag, 1975), Band I, S. 788. (向坂逸郎訳『資本論(3)』[岩波書店, 1969年], 411頁。)
- (15) J. H. Plumb, *England in the Eighteenth Century* (Harmondsworth: Penguin Books, 1963), p. 187.
- (16) Robert M. Hutchins, "The Theory of Oligarchy: Edmund Burke," *The Thomist*, vol. V (1943), p. 78.
- (17) Lewis Namier, "The Character of Burke," *The Spectator* (19 December 1958).
- (18) *Ibid.*
- (19) Lewis Namier, "King George III: A Study of Personality," in *Crossroads of Power: Essays on Eighteenth Century England* (London: Hamish Hamilton, 1962), p. 127.
- (20) なおブルックも、バークの「二重内閣」説は「無意識の願望を現実へと投影しがちな精神の産物であった」と述べている。cf. John Brooke, "Edmund Burke," in Lewis Namier and John Brooke (eds), *History of Parliament: The House of Commons, 1754-1790*, 3 vols (London: HMSO, 1964), vol. II, p. 148.
- (21) Lewis Namier, *The Structure of Politics: At the Accession of George III*, 2nd edn (London: Macmillan Press Ltd., 1957), p. 238.

- (22) ネーション学派によるバーク断罪の詳細は、cf. Peter J. Stanlis, "Edmund Burke in the Twentieth Century," in Peter J. Stanlis (ed.), *The Relevance of Edmund Burke* (New York : P. J. Kenedy & Sons, 1964), pp. 30-41 ; Kramnick, *op. cit.*, pp. 43-44 ; 鶴田, 前掲書, 164-76頁参照。
- (23) 「バーク・リヴァイヴァル」を担った人々の主要作品を挙げておこう。Ross J. S. Hoffman & Paul Lavack (eds.), *Burke's Politics* (New York : Alfred A. Knopf, 1949) ; Russell Kirk, *The Conservative Mind : from Burke to Eliot*, 6th revised edn (Indiana : Gateway Editions, Ltd., 1978, first published 1953) ; Charles Parkin, *The Moral Basis of Burke's Political Thought* (New York : Russell & Russell, 1968, first published 1956) ; Carl B. Cone, *Burke and the Nature of Politics : The Age of the American Revolution* (Lexington : University of Kentucky Press, 1957) ; *Idem*, *Burke and the Nature of Politics : The Age of the French Revolution* (Lexington : University of Kentucky Press, 1964) ; Peter J. Stanlis, *Edmund Burke and the Natural Law* (Ann Arbor : The University of Michigan Press, 1958) ; Francis P. Canavan, *The Political Reason of Edmund Burke* (Durham : Duke University Press, 1960) ; Burleigh Taylor Wilkins, *The Problem of Burke's Political Philosophy* (Oxford : Clarendon Press, 1967).
- (24) 全10巻の内訳は次の通りである。  
 Vol. I, April 1744-June 1768, ed. by Thomas W. Copeland (1958).  
 Vol. II, July 1768-June 1774, ed. by Lucy S. Sutherland (1960).  
 Vol. III, July 1774-June 1778, ed. by George H. Guttridge (1961).  
 Vol. IV, July 1778-June 1782, ed. John A. Woods (1963).  
 Vol. V, July 1782-June 1789, ed. by Holden Furber (1965).  
 Vol. VI, July 1789-December 1791, eds by Alfred Cobban and Robert A. Smith (1967).  
 Vol. VII, January 1792-August 1794, eds by P. J. Marshall and John A. Woods (1968).  
 Vol. VIII, September 1794-April 1796, ed. by R. B. McDowell (1969).  
 Vol. IX, May 1796-July 1797, Additional and Undated Letters, eds by R. B. McDowell and John A. Woods (1970).  
 Vol. X, Index Volume, comps by Barbara Lowe, P. J. Marshall and John A. Woods (1978).
- (25) *A Note-Book of Edmund Burke : Poems, Characters, Essays and Other Sketches in the Hands of Edmund and William Burke*, ed. by H. V. F. Somerset (Cambridge : At the University Press, 1957).
- (26) Ruth Anita Bevan, "The Political Philosophies of Edmund Burke and Karl Marx : An Analysis of their Relevance to Contemporary Politics," Ph. D. dissertation, New York University, 1969, pp. 18-19.
- (27) 1959年に、ペーター・スタンリスを編集者とする雑誌 *Burke Newsletter* が、デトロイト大学から年3回発行されることになった。しかし本誌は、1967年に *Studies in Burke and His Time* と改題され、同じくスタンリスを編集者としてアルフレッド大学から刊行されることになった。更に1979年になると、*The Eighteenth Century : Theory and Interpretation* と再び改題され、R・M・マークレイ (Rober M. Markley), J・R・スミッテン (Jeffrey R. Smitten), J・C・ワインシャイマー (Joel C. Weinsheimer) を編集者として、テキサス・テック大学から発行されるようになり、今日に至っている。
- (28) Kramnick, *op. cit.*, p. 44.
- (29) *Appeal from the New to the Old Whigs*, 1791, *The Works of Edmund Burke*, 12 vols (Boston : Little, Brown, and Co., 1871), vol. IV, p. 81.
- (30) Harold J. Laski, *Political Thought in England : from Locke to Bentham* (New York : Henry Holt and Co., 1920), p. 214. (堀・飯坂訳『イギリス政治思想(II)―ロックからベンサムまで』〔岩波書店, 1958年〕, 161頁。)
- (31) Burke to Dr. William Markham (post 9 November 1771), *Correspondence*, vol. II, p. 282.
- (32) *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, 1770, *Works*, vol. I, p. 530. (中野好之訳『現代の不満の原因を論ず』〈エドモンド・バーク著作集(1)〉みすず書房, 1973年, 275頁。)
- (33) William Godwin, *Political Justice*, 3rd edn, 2 vols (Toronto : University of Toronto Press, 1946), vol. II, pp. 545-46.
- (34) Laski, *op. cit.*, p. 172. (邦訳, 127頁。)
- (35) Cf. Gerald W. Chapman, *Edmund Burke : The Practical Imagination* (Cambridge, Mass. : Harvard University

Press, 1967) ; Frank O'Gorman, *Edmund Burke : His Political Philosophy* (London : George Allen & Unwin Ltd., 1973).

- (36) Thomas W. Copeland, *Our Eminent Friend Edmund Burke : Six Essays* (Westport, Connecticut : Greenwood Press, 1970), p. 5.
- (37) 『崇高と美』及び『自然社会の擁護』を論じたものとしては、例えば次のようなものがある。 William Guild Howard, "Burke among the Forerunners of Lessing," *PMLA*, vol. XXII (1907), pp. 608-32 ; Herbert A. Wichelns, "Burke's Essay on the Sublime and its Reviewer," *The Journal of English and Germanic Philology*, vol. XXI (1922), pp. 645-61 ; Samuel H. Monk, *The Sublime : A Study of Critical Theories in 18th Century England* (Ann Arbor : The University of Michigan Press, 1960) ; Dixon Wecter, "Burke's Theory Concerning Words, Images, and Emotion," *PMLA*, vol. LV (March 1940), pp. 167-81. J. T. Boulton, Introduction to Burke's *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful* (London : Routledge Kegan Paul, 1958), pp. xv-cxxvii ; Barbara C. Oliver, "Edmund Burke's Enquiry and the Baroque Theory of the Passions," *Studies in Burke and His Time*, vol. XII, no. 1 (Fall 1970), pp. 1661-76 ; Murray N. Rothbard, "A Note on Burke's *Vindication of Natural Society*," *Journal of the History of Ideas*, vol. XIX (January 1958), pp. 114-18 ; John C. Weston, Jr., "The Ironie Purpose of Burke's *Vindication Vindicated*," *ibid.*, vol. XIX (June 1958), pp. 435-41.
- (38) O'Gorman, *op. cit.*, p. 18.
- (39) このことを見事に論証した一例として、渡辺浩「道と雅び——宣長学と『歌学』派国学の政治思想史的研究」(『国家学会雑誌』第87巻9・10号, 11・12号, 第88巻3・4号, 5・6号)がある。

〈付記〉 本稿は、近く刊行を予定している『エドモンド・バーク政治思想の形成』の「序論」として書かれたものである。